

IV-304

「山アテ」行為にみる船上からの景観認識に関する研究

立命館大学大学院 学生会員 卯田宗平

立命館大学理工学部 正会員 笹谷康之

1 はじめに

水上交通が盛んだった頃、船上から陸を眺めるという景観体験は、今よりもはるかに豊かであった。それは人々が、情緒の体験にしる、実用的利用にしる、信仰的眼差にしる、たえず環境を読み取り、意味を付与してきたからだ。こうした、海側からの視線を読み解くことは、沿岸域の景観計画に寄与するのみならず、豊かな視体験特性を取り入れた水運計画にまで適応可能である。

そこで本研究は、船上からの景観認識を、そこでの重要な視認行為である「山アテ」¹⁾の事例分析より明らかにする。具体的には、①船上からの空間認識、②船上から印象的に映る稜線の組み合わせ条件、③船上景の視知覚特性を明らかにする。

2 研究の方法と調査対象地の概要

概して、山アテ法は、対象となる目標物や狙う魚により様々である。そのため、山アテが行われている地域への現地聴き取り調査手法を基本とし、そこで得た具体的な事例から共通的な側面を捉えていく。

調査対象地は、近江八幡市長命寺町の琵琶湖沖合約1.5 kmにある周囲1.5 kmの沖ノ島周辺。特に沖ノ島は、尾山（標高220m）と頭山（標高130m）という二つの山からなりたち、その特異な姿は山アテの好目標とされる。

3 「山アテ」にみる船上からの空間認識

滋賀県沖ノ島を対象とした現地調査において、「山アテ」で使用される筋（ズ）を31通り収集した（図1）。

3-1 陸上景の形状認識

使用される目標物を、まず一対の目標物の前後に、すなわち手前側の要素「テマ」²⁾とその奥側の要素「オ」の二つに分け、各々の形状特性を基に分類する。（図2）ここから以下のことが明らかになった。

- * 「テマ」は、特異な山容をもつ山頂や海面に突き出た岬、岬前の岩などすべてが突起状である。
- * 「オ」は、いずれも遠景距離にあるため、稜線に著い変化のある所が標定されている。
- * 限られた「テマ」を基軸に、「オ」の微妙な稜線変化を有効に用いている。

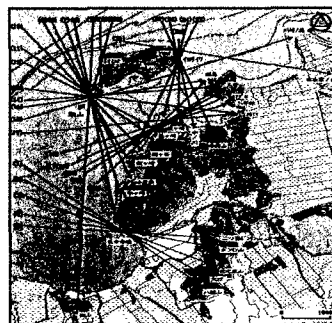


図1 沖ノ島周辺で行われている山アテの筋

形態特性	自然地形		
	独立峰型	連山山頂型	連山山麓型
模式図と視認点			
「テマ」の数	12		
「オ」の数	3	9	1

自然地形		地物	
出峰型	引浦型	孤島孤岩型	突起地物型
14		5	1
8	6	2	3

図2 視認対象物の形態特性

3-2 命名依拠にみる海上空間の認識

次に、アテ山に付与された呼称に注目し、その命名依拠を明らかにする。表1からも分かるように、アテ山の命名法は3つに大別できる。ここで注目したいのは、相対的知覚に基づく命名行為である。

これらの呼称は、沿岸付近の農民が用いる地名とは異なる名称が付与され、漁業社会の中でのみ通用する。こうした背景には、以下の二点が考えられる。

- * 農民が付与している地名をすべて用いたのでは、海上空間の認識がたちまち複雑になる。
- * 陸上で生業を営む農民が名称を与えていない地形でも、海上からは印象的に映る。

変化の乏しい海上空間において、聞くだけでイメージでき、見れば連想できるこうした地形は、漁業者の空間認識の助けとなっているのである。

Key Words : 景観認識、山アテ、船上景、視知覚特性

Address : 〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1 TEL (077) 565-1111 FAX (077) 561-2667

表1 命名依拠に基づくアテ名分類

命名 依拠	通称名 使用	使用されている呼称	
		相貌 体験	擬人化 擬物化
		八幡山、北之庄山、牟婁山、頭山、川口、堀切、三年林、赤崎、 申ヶ崎、小豆浜、鯉ヶ崎、船ヶ谷、関取場、鯉ヶ崎、中ノ川、 鍋島、康ヶ岩、長命寺港、川崎ノ森、出在家ノ森、火焚場、藤ヶ崎	
		大が、おが、やが、まが山、二つ目まが山、	
		おが、天井山、二つ目天井山、イ明切、	

4 船上からの景観認識と視知覚特性

4-1 「山アテ」にみる船上からの景観認識

海上において、自己の位置を知ろうとする漁業者に印象的に映る稜線の組み合わせ条件として以下の事がいえる。

- * 二本の稜線が、鉛直・水平方向に重なり合っている地点は、斜め方向のそれらより印象的に映る。
- * 二本の稜線の間隔が、鉛直・水平方向に接近している地点は、斜め方向のそれらよりも印象的に映る。

前者は、鉛直・水平方向の重なり具合に付与した呼称が多いこと、また鉛直・水平に延びた領域は、斜め方向に延びた領域よりも図になりやすいとする大山³⁾の説明からも理解できる。

また後者は、稜線が斜め方向に接近している場合、指を用いた間隔視認が行えないこと、加えて錯覚が生じやすいのでアテ対象にならないことから理解できる。

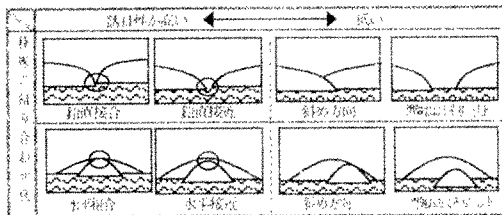


図3 稜線の組み合わせがもつ意味

4-2 海上からの視知覚特性

漁業者は、呼称を山塊全体から稜線の微妙な変化までまんべんなく付与していることが分かった。つまり彼らは、陸上景に対し巨視的な望見から凝視的な細見まで、あらゆる視覚的働きかけを行っているのである。

今回の調査で明らかになった、こうした視覚と言語を併用した空間分節行為のことを「視界の集束行為」を名付け、その広狭度合を「視界の集束深度」と指標付けた。そして、ひとみを凝らしてただ一点だけを見つめることを「視界集束深度が深い」とし、一目に広く見渡すことを「視界集束深度が浅い」とする。(図4)

これまでの結果に基づいて、視界の集束深度が深くなる、言い換えれば誘目性が高く凝視されやすい目標物の特性を挙げると以下ようになる。

- * 二本の稜線が鉛直・水平方向に重合又は接近している地点
- * 水陸境界部の先端、岬前の独立岩、麗容な峰の頂部
- * 連続しているスカイラインの突起部・鞍部

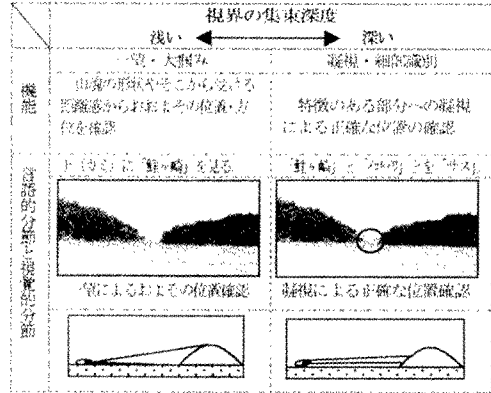


図4 「視界の集束行為」の考え方とその機能

むしろ、視焦点を集中させることは、陸上・海上を問わず行われる行為であり、この指標はいずれにおいても用いることが出来る。しかしながら、特に船上では、茫漠と広がる海上をこして主対象を眺め、焦点の度合いをもって自己の位置を確認することが多いため、この視覚的な働きかけは特に重要な体験であると考えられる。

5 結論と今後の課題

本研究で明らかになった事柄は以下の通りである。

- ①船上から視認されやすい目標物の形状特性を明らかにした。また、呼称は、漁師独自の認識像に依拠したものを使用していることが明らかになった。
- ②山アテの視認行為と人間の視覚特性から、船上より印象的に映る稜線の組み合わせ条件を明らかにした。
- ③視覚と言語を併用した空間分節行為が、特に船上からの重要な視体験であることを導き出し、その行為を「視界の集束行為」と名付けた。また、誘目性が高く凝視されやすい目標物の特徴を明らかにした。

今後は、海岸地形の異なる地域において、この種の山アテ実態調査や考察を行い、視知覚環境や空間認識を更に一般化する必要がある。

参考文献及び補注

- 1) 山アテに関しては、櫻田勝徳 (1968)、漁撈の伝統、岩崎美術社に詳しい。
- 2) 沖ノ島の漁師は、手前側の目標物を「テマエ」、奥側を「オク」と呼んでおり、本稿でもその呼称を用いることとする。
- 3) 大山正 (1970)、講座心理学第四巻知覚、東京大学出版会